

## 「近世先賢書簡集」にみえる書物の貸借

吉岡義信

印刷技術が発達し大量の出版物が氾濫する以前においては、書物は貴重なものであり、そのため貸借もおこなわれていたわけで、書物の筆写も当然行なわれていた。手紙の中にもこうした文面が残されている。その例を『近世先賢書簡集』（新潟県立佐渡高等学校同窓会 1994年発行）の中からいくつか見てみたい。なお、釈文と読み下し文は同書簡集による。

①水戸藩の北辺探検家・木村謙次が文人・田辺大人に宛てた書状  
幾久敷歳ニか有之候、観瀾集扱々／寛留御怒憤之御事恐入候、  
則拙篋底ヨリ取出し、御全璧仕候／御落掌可被下候、かりす  
かり申候所、／愉快なる文辭ニも無之、唯是迄／博物之人好  
す搜索之砌ニ備／申位の事と早々御返璧とも存候所、／商夫  
走出人者面倒かり申候／尤そまつニいたし、紛失か或は／濡  
し破損も有之候而ハと存、／邪魔にはいたし候所、謹而拙篋  
ニ／こみ置申候、此節寛在之御申附／何分御免恕奉祈祷候

何年も前に拝借した『観瀾集』お返しいたします。『観瀾集』の中味はたいしたものではなく、早速お返ししようと気に掛けかけながら、商人などに託して紛失したり、破損したりしてはと思ひ篋に仕舞いこみ、今になってしまいました。どうかお許し下さい。

②水戸藩の儒学者・立原翠軒が田辺造酒之介（①の田辺大人と同一）に宛てた書状  
御やくそく仕候御書物／とも、三冊拝見を許され／奉謝候、  
皆々珍しき／歌論とも二御座候、甚／おもしろく御座候、皆  
々高／申度候、其内留借仕度候、

お約束の書物三冊とも拝見させていただき感謝申し上げます。どれも珍しい歌論、はなはだおもしろいもので、高く評価したいと思います。そのうちしばらく拝借したいと存じます。

③国学者・屋代弘賢が塙保己一に宛てた書状  
抑舜舊記十冊の内／先五冊相濟候間／返進仕候、又五冊／に  
ても十冊にても／御かし可被下候

『舜舊記』十冊の内、まず五冊を返却する。また五冊でも十冊でもよいから貸してほしい。（おそらくは保己一所有の本を借りて順次写本をしている際の書状であろう）

④河内国西代の文人大名・本多忠統が幕府お抱え医師・曲直瀬養安院（正珪）に宛てた書状  
大復集寫候間、致返却候、／別に書付懸御目候、此分者先達  
而／寫完候間、此外ヲ借用仕度候

『大復集』を写し終わったので返却いたします。別に書付（書名のリスト）をお目にかけて。このリストに載っている書物はすでに写し終わっているの、御蔵書のうち、リストにないものを拝借したい。

こうした書物の貸借には、某かのお礼もしていたようで、①の書状の続きには  
尤御初物／として何か進上仕度候所、紙漉も／漸初立申候而、  
漉溜不申候、況復／銭はなし、からかえし二仕候得共、／金  
銀有合候時、何分好キ物進上御納候、／御宥可申上候、故舊  
不忘御／寛恕奉祈候

とあり、「お礼に初物をと紙を考えたのですが、紙漉きがはじまったばかりで手に入らず、空返しになって申訳ありません。」と紙をお礼の品に考えていたようである。④の書状にもお礼とは書いてはないが「書簡昏」を進呈したとある。また、兵学者・砲術家の清水赤城が水戸藩の儒学者・青山拙齋に宛てた書状にも「拙著一卷御返却被成／下慥奉落手候」と自分の著書が返却されたこと、さらに「鶏卵一匡御恵賜被成下奉拜謝候」と鶏卵をいただいたお礼が述べられている。これ以外にも鶏卵を送ったという書状もあり、当時「紙」や「鶏卵」が贈物のひとつとして考えられていたものと思われる。

このほか、貝原益軒が門弟の竹田春庵に宛てた書状の中に「焦氏筆乗送被成由御書中二見え申し候へども不來候、先御留置不苦候、通鑑も同意ニ可存候」とあり、『焦氏筆乗』を送ったと手紙にあるが届いていない、そちらに留置いても構いません。『通鑑』についても同様です。と春庵に貸出している書物に対して益軒が督促しているわけでもなく、留置いたままでかまいませんと非常に寛大であったことがわかる。

以上のように、いくつかの例をあげて書物の貸借について見てきたわけであるが、当然のことながら貸出す方も借りる方も書物を大切にしており、書物に対する愛着が行間より見てとれる気がする。

（よしおか・よしのぶ 別府大学図書館事務長）